



新年度を迎えて

医学研究科長 井上芳郎



平成12年度より北海道大学は大学院重点化大学として新たな出発となります。医学部におきましても、医学部所属の教官は全て大学院医学研究科の教官に配置換えになりました（なお、附属病院の教官は病院が医学部附属であるため従来通り医学部所属の教官となります）。現在の大学を取りまく動きについて、ご報告申し上げ、医学研究科をさらに発展させるべく、皆さんの英知と力を結集して運営に当たりたいと考えております。

①大学院重点化大学への転換と今後の課題

上に述べたように医学研究科の大講座制への移行が完了しました。これは医学部開設以来の最も大きい改組です。医学部の構成員の大多数は小講座制の中で、教授を頂点とするピラミッド型の組織の中で活動することに慣れ親しくきました。テーマを絞って優れた研究成果を挙げていくためには小講座制は効率の良い制度ですが、教育や診療あるいはプロジェクト的な研究など横断的な視点が必要な分野では非効率的と見なされており、文部省が重点化に当たって大講座制にこだわったのはこの点を重視したからに他なりません。現在のところ大講座制といつても建物内での各分野の配置に整合性がないところが多く、ソフトの面でもハードの面でも現状のままでは当初の意図を直ぐに達成するには難しいところがあります。しかし、プロジェクト研究、研究会の開催、柔軟な人事などソフト面での講座内、専攻内のまとまりは可能であると考えます。今後、教官の方々にも、大講座制が敷かれていることを意識して、組織としての活性化を図るよう努力することが求められるようになるでしょう。

②学校教育法の改正について

本年4月から学校教育法の一部が改正になり、大学の運営方針が表だって変わっているようには見えないにせよ、法律のうえでは大きい変化が見られます。今まで暫定的に大学に評議会や教授会が置かれ運営されてきましたが、今後は法律によって、大学の構成員による審議機関としての評議会、大学外の構成員からなる運営諮問会議の設置や、研究科や学部にあっては教授会を置くことが法律化され、大学運営に自由度を与えるながらも、総長、研究科長、学部長の権限が強化されています。一方では、大学評価機関が、文部省のもとにある学位授与機構の中に設置されました。これにより、大学の活動状況が、継続的に第三者評価を受けることになり、これからも絶え間ない教育・研究・診療活動の向上を目指す必要があります。

③医学研究科・医学部の点検評価について

上に述べた大学評価機関による第三者評価は、大学全

体については毎年テーマを決めて（例えば留学生に関して等）、全国立大学を対象に行うものと、全国の大学の同一学部を対象に研究または教育について5年ごとに行うものに分かれます。本医学部では平成3年より研究活動の点検を行ってきました。また、平成10年に研究活動についての外部評価を行いました。本年度はさらに、学部一貫教育の卒業生がはじめて出ることから学部教育の点検と、重点化による大学院教育体制の点検を行う必要があります。医学部教育の各コースについて教官および学生から意見を聴取しながら、6年前に始まった6年一貫制のカリキュラムを点検し、修正すべき点はできるだけ迅速に手直ししていく体制を作るつもりです。本年の北海道大学全体における点検項目は「教官の業績総合評価」と「大学院教育」に決まっています。これと歩調を合わせながら平成11年度の医学研究科・医学部の点検と自己評価ができるだけ早く行って、活動性の高い組織に作り上げて行きたいと考えます。

④学士入学者の教育について

平成14年4月に、大学を卒業した学士5名を3年次に編入させる学士入学制度が始まります。そのために平成12年に入学する一般学生のカリキュラムが手直しされました。一般学生と進度が6ヶ月遅れることになりますので生理系コースを履修する上で若干の負担が予想されますが、既に大学生活を経験していること、医師になる動機が明確になっていることを考えると、一般学生と同じメニューだけでなく、その能力を利用し、高めてやるために独自のカリキュラムを加える工夫が試みられても良いと個人的には考えています。いずれにせよ選抜法とカリキュラムのワーキンググループを作り、円滑に学士入学制度を導入することに努めます。

⑤国立大学独立行政法人化に関する動き

国立大学を独立行政法人とする問題は、国家公務員の定員削減の課題が先にあり、その員数合わせのために、行政組織の枠外の機関の一つに国立大学が対象になった感があります。法人運営の根幹をなす「独立行政法人通則法」は既に立法化されていますが、国立大学を念頭に置かないまま立法化したため、大学運営に全くそぐわない法律になっています。このことが1つの要因となって、現在、国立大学協会をはじめ多くの学識者が国立大学の法人化に反対を表明しています。一方、政治家の中にも、日本の高等教育の在り方からこの問題を論じるべきとの意見も始め、今後、法人化の問題は国会等で急速に進んでいくと思いますが、その設置形態が国立大学、「通則法」のもとでの法人化大学、あるいは国立大学を独自の法人組織にするのか、今のところ明快な方針は出ていません。いずれの設置形態にせよ、現在の国立大学に対して、第三者評価に耐えうる教育・研究・診療の実績を挙げること、経営・運営の合理化を進めることができ、今まで以上に国民から求められていることは確かです。

退官にあたって

脳神経外科学分野・教授 阿部 弘



私は昭和36年に北大医学部を卒業し、インターンから始まって、米国留学中の3年間を除いて、40年弱の間、北大医学部及び附属病院に御世話をになりました。脳神経外科を専攻しましたが、当時は、精神医学教室の中の脳神経外科診療グループに属し、助教授であった都留先生の指導を受けました。また諏訪教授の総回診もあり、精神科の一員として色々な行事にも参加し、多くの先輩の知己をえて貴重な経験をしました。昭和40年に脳神経外科が講座として独立し、都留先生が初代教授に就任しました。米国式の厳しいレジデント教育と多くの救急患者で、いかにして眠る時間と食べる時間を確保するかばかり考えていました。1970年代に入つて、顕微鏡下手術の導入により、脳神経外科の手術は、より微細で精密なものになり、手術成績は著しく向上しました。しかしそれだけ手術時間が長くなり、10~20時間という手術が続きました。私は、手術を記録したくて大きな16mm映画フィルムを何本かかかえて、世界の学会で発表しました。やがて、頭蓋頸椎移行部病変、頸椎後縦靭帯骨化症、脊髄空洞症、脊髄髓内腫瘍などの患者が、海外から紹介されて、北大病院へ送られてきました。手術器械をかかえて、海外へ手術に出かけたことも数回ありました。海外では、手術は、助手や看護婦とのコミュニケーションがよくできず大変でした。台湾では国賓扱いで気をよくしましたが、責任は重く、プレッシャーがかかりました。北大病院では病棟もはじめは海

外からの患者に慣れず大変でしたが、最近は国内の患者に対すると同じ受け止め方で接するようになりました。

研究面では、私の学位論文は、“急性頭蓋内圧亢進の研究”でしたが、米国留学では、実験脳腫瘍の作成とlysosome酵素の研究にたずさわり、1971年に帰国後は、教室で実験脳腫瘍の研究をすすめました。やがて腫瘍免疫の研究へと発展し、最近のp53遺伝子の研究と進んできました。その他に、脳循環、脳虚血などの脳血管障害の研究及び脊髄損傷の研究が実を結んで、多くの成果を挙げてきました。私は、若い人には、機会があれば、どんどん留学すべきだという考えでしたから、次々と送りだし、少ない教室員にもかかわらず、一時は8名もの留学生がおり、教室には数名より残っていない時期もありました。そして彼等の留学中に、私は必ず一度は立ち寄って、仕事ぶりをチェックして歩きました。

教授就任後の16年間に、発表された論文は総数で1397編あり、うち英語の論文が396編になりました。私の叱咤激励について、期待に応えてくれた教室員に感謝しております。採択が最も困難な米国脳神経外科学会で口頭発表の日本からの演題は毎年数題しか採択されない中で、北大からは、必ず1~2題採用されており、当教室の実績は日本を代表するものとなりました。

一日の大半を、手術室で過ごし、外界の様子などわからず、夜遅く医学部の玄関を出ると外は大雨（又は大雪）だったことに初めて気がつくということも多くありました。医学部を去るにあたって、やり残したことはないとは言えませんが、激戦の試合後のような爽やかな気持ちです。長い間御世話をになりました。皆様の益々の御活躍と、北大医学部の発展を祈ります。

退官にあたって

眼科学講座・教授 松田 英彦



昭和30年4月に北大医学進学課程に入学し、のんびりと学生時代を過ごし、昭和37年8月に眼科学講座助手に採用されて以来、30有余年私にとりましては有意義に、そして楽しく、人生の大半を過ごさせていただいた北大医学部をこの3月31日で退官することになりました。この間、大過なく教官としての責務を果たせたのも医学部の多くの教官と事務職員の方々のご指導、ご支援の賜物と思い、心より感謝致しております。

眼科学を始めて学び、実験・研究の手ほどきを受けた個性豊かな旧眼科学研究棟は病院外来棟の下に消え、私も設計に関与した医学部南研究棟も、いまや効率の悪い

空間を残すのみのものかと思います。眼科学講座も私の退官に会わせたように、この3月で名称が消滅し、新しい大講座に移行します。老兵は消え行くのみといわれた心境です。

医学の進歩は日進月歩であり、ますます細分化も進行しています。医学教育の改革も呼ばれて久しくなりますが、最近はその実行が厳しく求められていると思います。大学院大学に移行すれば大学院生の教育・指導にも大きな責任が生じるもの当然であります。このような条件の中で、世界に通じる、それをリードするような業績をいかにして残すか、大学人としての真価が問われる時期かと思います。教官、職員各位が十分に力を發揮され、北大医学部がさらなる発展を遂げられることを祈念して、私のお礼とさせていただきます。

退官にあたって

保健管理センター・教授 本間行彦



自分でも気づかぬうちに退官の日がやってきました。時の流れの早さをしみじみと感じております。私は札幌生まれの札幌育ちで、文字どおり「井の中の蛙」を通してきましたが、今もって縁多い北大キャンパスは離れ難いものがあります。苦笑の一語です。

この間、何をやってきたかと振り返るとき、身の細る思いがしますが、自分なりに精一杯やってきたという満足感のあることも事実です。しかし、これは、陰に陽に、沢山の方々のご好意、ご援助によるもので、これなくして現在の自分が存在する筈もありません。特に、私を終始懇切に指導いただいた村尾 誠名誉教授、同僚として何から今までのご好意をいただいた川上義和教授に、この場を借りて心からのお礼を申し上げたいと思います。

私の研究は、呼吸器病学、なかでも原因不明で予後の悪い特発性間質性肺炎を中心に勉強してきました。そして、幸いにして、その原因が粉じん吸入や膠原病に起因することを臨床疫学および動物実験によりある程度明ら

かにすことができました。また、その治療として、漢方治療が予想以上に期待できることも知りました。平均予後が4、5年の疾患ですが、既に10数年にわたって通院してきてくれている患者さんが何名もおります。

漢方医学の研究は、私の父の難治のイレウスが漢方治療により治癒したのをきっかけに始めたもので、既に20年余になりますが、その後、間質性肺炎のみならず、難治の気管支喘息、膠原病、アトピー性皮膚炎など、多くの疾患に応用して期待をはるかに上回る成績を残すことができました。漢方といえば、未だに非科学であり、市民権を得たものとはとてもいえませんが、この科学化に向けて私自身、さらに努力を続けていきたいと考えております。

私は、ヒトという生命体を対象に「生と死」を見続けてきたつもりですが、今も心の中に残された「人は何のために生きているか」、「なぜ生き続けねばならないのか」、そして「医学・医療はその場でどのような役割を果たすべきか」という哲学的命題の解明にもさらに挑戦していきたいと思っています。皆様にはこれからもいろいろとご指導いただかねばなりませんが、どうかよろしくお願ひ申し上げる次第です。

退官にあたって

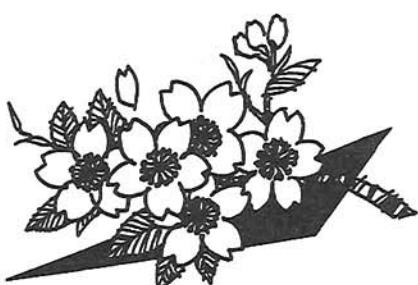
内科学第一講座・教授 川上義和



この度停年により北大を退官することになりました。教官としては約30年の長きにわたり、教授会のみなさまに大変お世話になりました、心から感謝申し上げます。総長のご招待の夕食会、医局と同門会の祝賀会、そして最終講義などがすんだ今でも退官という実感がわきません。それほど長く北大に住み着いたと

言うことなのでしょう。

いま大学はいろいろな外圧やチャレンジを受けています。私のような老骨がそれに対応するよりは、最近とみに増えてきた新しい力をもって解決にあたったほうが良いに決まっています。どうか英知と力を思い切り發揮して、困難に立ち向かっていただきたいと思います。私はしばらく札幌に勤務しますので、今後なにかとお目にかかる機会があろうかと思います。応援団として北大から目を離さずにいたいと思っていますので、よろしくお願ひします。



退官にあたって

細胞薬理学分野・教授 菅野 盛夫



24年間の長きに渡って医学部教授を勤めることができたのは、多くの方々の有形無形の後押しがあったからであり、感謝の気持ちで一杯である。特に、教授会のメンバーには大変お世話になったし、加えて、事務の方々の絶大なご協力があってのことであり、心から御礼申し上げたい。学外の方に停年で退職した旨を申し上げると、どう労つたら良いのか戸惑いの表情を一瞬見せることもないわけではないが、私にとっては、恙無く退官できることは慶事であって、おめでとうといって下さるのが一番嬉しい。また、教鞭をとる新しい仕事に従事できるのも、健康であるから許されるのであってこれも目出たい限りである。毎日、楽しく市営バス、地下鉄そしてJRバスを利用して通勤している。高校を卒業したばかりの若者と接していると、教育を今までどれだけ真剣に考えてきたのか忸怩たるものがあり、反省している。手抜き授業とまでは言わないが、学生の優秀な

頭脳も授業の一要素と当てにした授業を24年間やってきたのであるから、今までに私の授業を受けてきた、100名×24年、おおよそ2,400名の医学部学生に申し訳ない気がする。違った環境で教育を考えていると、改めて教育の実践の難しさを実感している。

時代が大きく変わりつつあるのを感じる。今までの時代の変革とは質を異にするように思われる。社会と大学の関わりが、今までの「大学の知」をキーワードにする歴史的連続性を基盤にした枠組みを越えたものになりそうである。IT革命もその一因となろうが別な要因も絡んでいるであろう。大学も企業と同じ社会の構成要因の一つであるから、大学の特殊性も制約されるのも致し方ないかも知れない。その変革の必然性を違った性格の大学で認識しながら、リーディング大学の一つである北海道大学の動向を見守りたいと思っている。

より一層忙しくなるのではないかと同情の念を禁じ得ないが、研究の面も忘れずに精進いただきたいと思っている。優秀な頭脳集団であるから高い評価を得る成果をあげるであろうことを疑わずに楽しみに待っていてほしい。

新評議員就任にあたって

腎泌尿器外科学分野・教授 小柳 知彦



私は昭和39年北海道大学医学部卒業後1年間のインターン、5年間の米国での外科・泌尿器科のレジデント期間を除くと昭和45年以来一貫して北海道大学にて教官として奉職してきました。昭和57年からは泌尿器科教授兼診療科長として医学部教授会・附属病院科長会の構成員にも加えさせていただいております。教官としては30年間の長きにわたるわけで退官の諸先輩が去られるこの春からは井上芳郎医学研究科長に次ぐ古株となってしまいました。今回大学運営に関する諸種の重要な事項を審議すると定められた評議会の構成員の1人に自分が選出されたのもむやみに年令ばかり重ねないでこのあたりで大学運営にも参画せよとの申し付けと理解しています。

国立大学においては独立行政法人化、大学評価機関、定員削減、情報公開等の問題をめぐって全国的にその在り方が議論されていますし、我が北海道大学そのものでも大学院重点化大学として教育研究体制のあり方と具体

的組織・運営の開始、大学と社会との連携、個性輝く総合大学の確立等21世紀を迎えて着手しなくてはならないいくつかの構想が丹保憲仁総長からもすでに提言されており、医学部では大学院重点化に加えて遺伝子病制御研究所の設置と医学部研究棟再開発、学士入学の実施などの問題があります。また急速に少子高齢化社会が進み医療制度のあり方が根本的に改革されて行くなかで医学部附属病院も経営改善を柱として中・長期計画の確立と運用、外来棟増築を見据えた再開発計画の継続、平成16年度制度化が決まった卒後臨床研修体制など多くの当面する問題をかかえて日常診療が行われています。思い浮かぶものを羅列しただけでも当面の問題は多岐にわたりしかももいずれもがその解決には多くの英知の結集と協力が不可欠のものばかりと考えられます。

評議会の構成員は総長・副学長・研究科長等の基本的構成員23名と研究科・附属研究所ごとに選出される教授26名と総長指名の4名総数53名より成ると理解しています。今後は医学部・附属病院から選出された一員の自覚のもとこれ等の方々と力を合わせ少しでも北海道大学の発展に貢献出来ればと思っていますのでよろしく皆様の御理解と御協力の程お願い致します。

お知らせコーナー

ノーベル医学生理学賞受賞者 Louis Ignarro 教授が講演

去る4月4日、1998年度ノーベル医学生理学賞を受賞した米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)薬理学講座 Louis Ignarro 教授が北大医学研究科で講演を行った。Ignarro 教授は循環病態内科学分野



北畠 顯教授が代表世話人である北海道 Physiome 談話会の第2回講演会の演者として招かれたもので、同教授がノーベル賞を受賞した研究題目である一酸化窒素に関し、「Nitric Oxide as a Unique Signaling Molecule in the Cardiovascular System」と題して講演した。講演に先立ち、井上芳郎医学研究科長を表敬訪問した Ignarro 教授は、井上教授、北畠教授、研究分野が同じである附属病院循環器内科 佐久間一郎講師らとともに、ノーベル賞受賞に至った背景や大学の研究体制などについて懇談した。講演は医学部臨床大講堂で行われ、新学期開始前であるにも関わらず参加した医学部生を始め、100名以上の医学関係の聴衆を集め、一酸化窒素研究の歴史、ノーベル賞に至った経緯さらにノーベル賞受賞式の模様などが述べられた。Ignarro 教授は毎年 UCLA で best teacher's award を受賞していることもあり、その講演内容は明解かつ聴衆の興味をそそるものであり、医学部生や研究者が今後研究を行う上で非常に参考となるものと思われた。

アメリカ医科大学協会アシスタント副学長デボラ・ダノップ氏が講演

去る3月28日(火)午後1時より医学部図書館3階特別会議室において、アメリカ医科大学協会アシスタント副学長デボラ・ダノップ氏を講師に招き、「北米における最近の医学教育について」と題して講演会を開催し

ました。北米における大学改革等について1時間以上にわたり講演をいただき、会場に集まった教職員は熱心に聴講しました。

大学院入学状況について

専攻	定員	入学数(留学生内数)
生体機能学専攻	20	4 (2)
病態制御学専攻	30	43 (5)
高次診断治療学専攻	24	38 (7)
癌医学専攻	12	5 (1)
脳科学専攻	14	7 (1)
社会医学専攻	10	6 (1)
計	110	103 (17)

平成12年度の医学研究科の入学者は、社会人入学4名を含め103名(男77、女26)であった(左表)。本年度は、3か年計画の大学院重点化が完成した年度であり、すべての専攻で新しいカリキュラムのもとに授業が展開されます。

医師国家試験合格状況

第94回医師国家試験が3月18、19日に実施され、4月20日午後に合格者の発表がありました。

平成11年度の本学部卒業生100名が受験し、86名が合格となり、新卒者の合格率は86%でしたが、既卒者

を加えた合格率は80.2%となりました。また、新聞の報道によりますと、旭川医大が83.3%、札幌医大が89.8%、全国の平均合格率は79.1%とのことでした。

医学部学位記伝達式行われる

平成12年3月24日（金）10時から本学体育館での卒業式に引き続き、13時から本学部において学位記伝達式が行われました。

西 教務主任の開会の辞で始まり、父母等の見守るなか、100名の卒業生の名前が呼び上げられ、井上芳郎医学部長、田邊達三同窓会長等の祝辞を受けた後、卒業生を総代して大園啓子さんから答辞が読み上げされました。

大園さんは、そのなかで「臨床実習中に、患者さんから『いいお医者様になって下さいね。』との言葉に励まされ、疾患を治すのみならず、患者さんを一人の人間としてしっかり看ことのできる医師を真摯に目指したい。」との抱負を述べました。



卒業祝賀会

医学部、今年の入学者

平成12年4月7日（金）10時から本学の入学式が挙行され、同日13時30分から臨床大講堂において医学部入学式が行われました。

今年度の学生募集は、入学定員5名減の95名で行われました。また、入学者は、前期日程定員85名に対し387名が受験（倍率4.6倍）、後期日程定員10名に対し105名が受験（倍率10.5倍）し、難関をくぐり抜けての入学となりました。

入学者95名の出身高校による主な出身地は北海道39名、東京都17名、神奈川県6名、大阪府4名、千葉県

及び愛媛県が各3名、などです。

最近5年間の道内出身者数は（平成8年度入学者から）49名、35名、34名、38名、39名となっております。

また、本年度入学者中の女子の数は前期16名、後期3名、合計19名であり、過去5年間の女子の入学者数は29名、18名、21名、26名、19名となっております。今年度の高校卒業者（現役）は35名で、過去5年間の現役者数は44名、39名、22名、40名、35名となっております。

新入生合宿研修について

本年度の新入生合宿研修は4月8日（土）、9日（日）1泊2日の日程で大滝セミナーハウスで行われました。

研修内容は、井上医学研究科長から「大学での教育について」と題して最近の社会状況の中での大学教育の在り方等について、西教務主任から「安全な大学生活について」と題して飲酒に対する注意について、岸 教授か

ら「大学生活の過ごし方」、阿部教授から「医学部のカリキュラムについて」及び先輩学生から「学生生活について」のお話がありました。

土曜日の夜には各クラブの上級生が貸切りバス2台で新入生の部員獲得のため訪れ、23時頃に成果をあげて（？）帰りました。

◆ 編集後記 ◆

本号から編集委員が代わりました。岸、小山委員に代わり、川口、寺沢、富樫が編集委員になりました。傳田委員と佐藤委員は引き続き留任し頑張っていただくことになりました。今回は、編集委員引継の委員会も、学会等が相次ぎ出席出来ず、見切り発車の状態でした。編集委員就任の話は天から振って沸いた話であり、広報の発行趣旨などは全く知らないままの状態です。今まで、広報は頂いておりましたが、中を開いて見るだけで読んだことはありませんでした。今回編集に携わるにあたり、編集部より、今まで発行された広報をいただきましたので、あらためて読ませていただきました。同窓会新聞や、学生新聞と同類の記事もありますが、やはりトピックスに目がいきました。今後はさらに、現在医学部で問題になっている事項に関して、多方面の方々からのご意見を掲載できるように編集したいと考えております。

最後に、前広報委員の岸 教授、小山教授、大変ご苦労さまでした。

（川口 秀明）

Home Page のご案内

医学部広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho/index.html>
でご覧になることができます。

是非、ホームページ広報をご覧ください。また、ご意見ご希望などの受け付け電子メールアドレスは、

ko-ho-office@med.hokudai.ac.jp
となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究科／医学部

発 行 北海道大学医学研究科広報編集委員会
060-8638 札幌市北区北15条西7丁目
連絡先 医学部庶務掛 電話 011-706-5003
編集委員 川口秀明、寺沢浩一
傳田健三、富樫廣子
佐藤松治